

2019年度 第1回日本語教育研修会 実施報告

国際交流基金日本語国際センター

築島史恵

1. 実施場所・日時

高雄会場：2019年11月9日（土）13：30～17：00（13：00 受付）

義手大学推广教育中心 9B（高雄市前金区五福三路 21 号 9 階）

台北会場：2019年11月10日（日）13：00～16：30（12：30 受付）

日本台湾交流協会台北事務所 B1 文化ホール（台北市松山区慶城街 28 号）

2. テーマ

「“21 世紀型スキル”を育てる授業活動とその評価」

3. 概要

(1) コンピテンシーを重視した教育の世界的潮流

研修会では、まず、コンピテンシーの育成を目指した教育の展開について概説しました。要点は以下のとおりです。

- 1980 年代後半、経済の発展に伴い、それまでの大量生産・大量消費を目指してきた姿勢の見直しが行われ、人的資源が注目されるようになった。「何を知っているか」だけでなく「(知識を活かして)何ができるのか」が問われる時代になり、1990 年代にかけて、「コンピテンシー」を定義しようという試みがなされた。
- OECD では 1997 年から 2003 年、DeSeCo プロジェクトが進められ、「キー・コンピテンシー」が選択された。この枠組みの核心には、「Reflectiveness」(思慮深さ)が位置づけられている。
- さらに、EU も、2006 年、独自に、8 つのコンピテンシーを発表した。
- 一方、アメリカでは、2002 年、「21 世紀型スキルパートナーシップ」によって、コア教科と学際的テーマ及び 3 つのコアスキル、4 点のスキル育成支援システムの枠組みが発表された。その後、ATC21s という国際研究プロジェクトが立ち上げられ、「21 世紀型スキル」として、4 つのカテゴリーからなる 10 のスキルを定義した。
- 上述の「キー・コンピテンシー」や「21 世紀型スキル」の枠組みは、各国の教育目標・教育カリキュラムに取り入れられることとなった。(台湾でも、2014 年、「国民核心素養」が発表された。)この 2 つの枠組みが取り上げている力を整理すると、①基礎的なリテラシー、②考える力・学ぶ力、③社会や他者との関係・自律、という共通したポイントにまとめることができる。
- OECD では、2015 年から「Education 2030」というプロジェクトを進めており、2018 年、中間的な報告としながらも、position paper を公表した。そこには、学習者を中心にした羅針盤(図)や、カリキュラムの再設計における原則(コンセプトやプロセスデザイン等)が示されている。
- EU も、8 つのコンピテンシーの見直しをはかり、新たな提言として発表した。特に外国語教育に関わりが深いと思われるのは、①Languages *competence*、②Personal, social and learning *competence*、③Entrepreneurship *competence*、④Cultural awareness and expression *competence* である。

(2) 日本語の授業の中で養える 21 世紀型スキル

そして、今まで授業でやってきたことの中に、教師や学習者の意識を変えるだけで、「21 世紀型スキルを育てている」と言える活動はないか、または何かの活動を少し加えたり変更したりするだけで、このスキルを養うことにつなげられないか、以下のキーワードが表す活動を体験しながら検討・整理を行いました。

読解：背景知識(スキーマ)の活性化、前作業、ピア・リーディング、読解ストラテジー

作文：コミュニケーションな課題設定、シンキングツール、読み手の意識、添削・評価、ピア・レスポンス

文法指導：発見学習(ディクト・グロス、シャドーイング)、文法項目の取舍選択、教科書の adaptation(適応化)

特に、「読み手を意識した(コミュニケーションのための)書く活動」と「協働学習」について焦点を当てました。協働力については、2018 年に発表された CEFR の『COMPANION VOLUME WITH NEW DESCRIPTORS』でも、仲介活動として「Collaborating in a group」「Leading group work」などの項目で入れられており、新しい時代に不可欠なコンピテンシーであると考えられていることがわかります。

(3) 21 世紀型スキルの評価(「Collaboration」を例に)

時間は短くなってしまいましたが、最後に、NC で行ってきた「にほんご人フォーラム」の中の教師研修で、中等教員の教師達が、学習者(高校生)の活動を観察しながら、Collaboration を測るルーブリックを作成したプロセスと試案について紹介しました。何日もかけて Collaboration をさらに分解し、いくつかの項目を立て、それぞれのルーブリックを作成しましたが、意見がきれいに一つにまとまったわけではありませんでした。しかし、その中で、ルーブリックを作成する際には、「いつ」「誰が」「誰を」「どのように」評価するかを区別して考えなければならないこと、さらに、それを現場で実際に活用するためにはある程度のシンプルさを考慮しなければならないことは明確になりました。21 世紀型スキルの評価は、まだ世界各地で試行錯誤されている段階ですが、台湾の先生方も含め、今後、様々な挑戦が期待されます。

4. 所感

ほぼ同じテーマの研修会が 2017 年度に行われていたことから、今回は、21 世紀型スキルを特別なものと捉えず、大掛かりなプロジェクトやイベントとしてではなく、授業の活動一つでも、それを意識できるのではないかと、というメッセージを伝えたいと考えました。どこの現場も、最終的に学習者を向かわせたい目標や従来のカリキュラムが決まっており、教師も準備に特別な時間を割くことができない場合も多いので、その中でもできる工夫を考えなければ、どんなに大切なものであっても「絵に描いた餅」になってしまうと思うからです。セミナーは、そのために、とにかく、様々な活動が 21 世紀型スキルと結びつけて行えるのだという実感を持っていただくために、とても大急ぎで体験をしていただく形式としました。その結果、参加者の方の中には、一つ一つの活動がやや消化不良になってしまった方もいらっしゃったのではないかと思います。「今までの 21 世紀型スキルのイメージが変わった」と言ってくださった方もあったので、お伝えしたいメッセージ自体は、届いたのではないかと思います。「21 世紀型スキルを」ではなく「21 世紀型スキルも」でいいと思うので、これから、皆さんそれぞれが、授業や活動の中に、この観点をに入れるには何を(ちょっと)工夫したらいいか、更にいろいろ挑戦して下さると嬉しいです。

時間に追われたワークショップにもかかわらず一生懸命取り組んでくださり、一緒に悩んだり考えたりして下さり、本当に感謝しています。ありがとうございました。

5. 参加者の声（アンケートから抜粋）

今、ちょうど台湾の新しい指導要領（12年義務教育）が実行されている第1学期になっていますが、今日の研修はまさに「21世紀型スキル」が本番の授業に実践できると思います。

ホームページで今回の研修会の紹介を見て、正直さっぱり分からなかったです。でも、今日参加できて、本当に良かったと思いました。

現在、ちょうどコンピテンシー育成を考えた授業づくりについて、勉強しているところなので、まず教師が活動を通して育成したい力、評価したい力を考えることの重要性を改めて感じました。

人を評価するのは難しいですね。

21世紀型スキルについてよくわかりました。

7. 会場の様子

・台北会場



・高雄会場



以上